



ようねんぎだより

令和5年11月8日(水) NO. 4

豊橋市幼年期教育学習会

「幼児教育と小学校教育の接続のために」

講師 名古屋短期大学 為田弘子先生



豊橋市幼年期教育学習会が、8月23日にライフポートとよはし中ホールで行われ、名古屋短期大学の為田弘子准教授より「幼児教育と小学校教育の接続のために」と題したご講演をいただきました。お話いただいたポイントを紹介します。

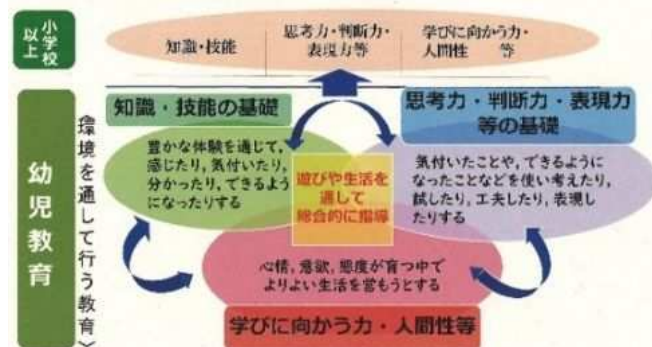
架け橋期教育の充実のために 10の姿の理解

- ・ 幼保こども園・小でお互いをまず知ることが大切。
- ・ 園と小学校がどのように連携して接続していくのか、幼児期の終わりまでに育ってほしい(10の姿)を共通理解し、うまく活用していくことが大切。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿



幼児期において育みたい資質・能力



- ・ 子どもは遊びを通じて学び、その経験が力になり、知識になり、それが積み上がっていく。そして小学校につながり、教科として学んでいく。

5歳児の育ちを小学校へ

劇遊びの話し合いの場面(サークルタイム)から考える

- ・ 自分のやりたい役をみんなの前で伝える経験
- ・ 一人では言えない・・・でも二人なら言える

→友達に頼んで自分の意見を言ってもらったことも認めていく。⇒肯定体験につながる。

→45分座っていられることが大切ではない。子どもは、「おもしろそうだな」「知りたいな」「やってみたいな」という思いがあれば、自ら活動していく。

大人のサークルタイム, 好事例としての豊橋市の取り組み

- ・ 組織的、継続的な取り組みの成果→保育公開、合同研修(学習会)の実施など

今後も子どもを真ん中に、幼保こども園・小が共に接続について学ぶ機会を大切にしていきたいです

～ 夢中になって遊ぶ子どもたちが、学ぶことが楽しいと思える子どもたちへ ～

参加者の声

幼保こども園から

鳶田先生の講演を聞いて、“やらない”を選べることも大切なことである、いつかそこに向かえる努力ができるように環境を整えるという言葉が印象に残った。環境を通じて、遊びから学んでいけるよう、今後の保育に活かしていきたい。



小学校に向けて、「～ができなければいけない」と考えてしまうこともあったが、今の子どもたちに何が育ってほしいのか、何に興味があるのかを考えて保育していきたいと思った。

何気ない子どもたちの言葉の中に、成長や意欲へつながるヒントがたくさんあることを改めて考えさせられた。大人が答えを出してしまうのではなく、生活や経験の中で、子どもたちからの発見をつないでいけるよう保育していきたい。

子どもの発見、つぶやき、やってみようとする育ちに対して答えを出そうとしてしまったり、教えようとしてしまったりすることが自分自身多く、その行為を振り返ることが大切だと感じた。

小中学校から

小学校に入るとすべてが遊びから始まる学習ではないので、切り替えが難しいと思った。やらせるのではなく、子どもが意欲的に取り組めるようにすることが、先生の腕の見せどころ。ただ、すべての授業では難しい。苦手なこと、やりたくないことにも取り組む力も育ていきたい。

45分座っていることが目標ではない。これは小学校教員が陥りがちな勘違いだと思う。45分座るのではなく、45分でどれだけ興味関心をもたせて学習できるかが大切だと考えた。

日々「どうしたら〇〇ができるか」と教育を進めているが、「どうしたら〇〇がやりたくなるのか」という視点を思い出した。今年2年生の担任をしており、「生活科で教える」という視点で、どんな力をつけたいのかと考えたら楽しくなってきた。「自分たちで考えて経験したことは積み上がっていく」という言葉を信じてがんばろうと思う。

環境が子どもたちの主体的な活動を引き出すということは、小学校教育で求められる「主体的、対話的で深い学び」につながっていると思った。「環境づくり」は幼保小をつなぐ、重要な一つのキーワードになると思った。



子どもたちが、安心して自分を発揮しながら、遊びから学びに向かうことができるように接続を大切にしていきたいですね。

